

CD対談

『F.フラグメンツ（2012）』（廻+フッソングが共同委嘱）

未来に向けて創る

廻) まず最初の2つの断片をもらった。twin leaves と、speedy。恋をした、インスピレーション。何か分からないけれど、いいものになるにしろという予感。今までとは違う原田の世界を感じた。期待したよりはるかに凄かったし今もそう思っている。難しく、発狂しそうだった。でも大きく、美しい、何という世界が広がっているにしろ、と感じました。

フッソング) 何か大きな事件が起こった後に書かれる、ナイーヴな、ドイツ語では「ペトロッフェンハイツ ムジーク」というものだが、表現する側（芸術家など）が人に対して感動的なものを目指し、或いはそう受け取られるのを期待して作る、稚拙な、子供っぽい作品、そういう中身の薄いもの、そういうものを、彼女が決して作曲しないことを期待した。そして僕らはがっかりしなかった。原田は何か全く異なるものを作曲した。それは廻さんが言ったように、深い意味で非常に美しく、でもいわゆる綺麗な音楽ではなく、それは日本で起こったことを利用したのではなく、むしろ、特別な感性によって希望を与える作品なのです。この点が、これまでの原田作品の中でも際立っている特徴です。各断片を注意深くみればそこには「美」、「深淵を覗くこと」、「ある人々への献呈」、「作曲者の内面の告白の深い表出」それに加えて更に「未来」がこの作品にはある。これはとても印象的です。また、楽器の組み合わせによる響きの可能性という面から見て素晴らしい。そしてそれは、何か効果を目的として、或いはウケを狙って行われる「流行を追った、或いは前衛的な奏法とか技巧」を利用していない、慾のない、ハンブルでモデストな音楽なのです。人々の注意や興味をひくための、目新しい何かをあれこれしていない。ただそこに存在する音楽。その点が興味深いのです。

原田) 3.11に対して、同業者たちが、瞬間的なリアクションによって様々な曲を発表しました。多くは「津波」とか「祈り」、「追悼」などの語が入ったタイトルで、でもとても表面的な内容の音楽と感じました。そんな作曲家たちの世界に自分もいるのかと思うと、かなりショックだった。

フッソング) これはもう古い議論だと思いますが「音楽には役割があるのか？」ということに繋がりますね。最も印象的な例の一つとして、シェーンベルクの「ワルシャワの生き残り」という作品がありますが、この作品の最も迫力のあるところは、曲中で、生き残った人々の言葉を聴くことでしょう。これは最も明瞭に出来事そのものに直結していますし、人々はそれを忘れるべきではないという作品なのです。しかし、私個人は、究極的には音楽には機能とか役割を持つものではないと思う。本当にいい音楽は、その存在そのものが深い希望であり、メッセージなど何も知らずに聴いても「oh my god, 人間という生き物がこんなものを作れるのか、美しい響き、和音。誰の音楽だろうが(バッハ、ベー

トーヴェン、クセナキスだろうとモーツァルトだろうと)、そこに創造的パワーを感じる時に、希望をもたらすと思うのです。なぜならそこに、第一に人が出来る最上のものがあり、第二に、人間とは一体なにを成し得るのかということの「窓」を見ることが出来る(その答えは見えないが)。人間がどこまで行けるのか、そんなところまで行けるのかという、驚愕を感じる、それはとても素晴らしいことで、それ、恐らく創造的パワーを背景に作られた音楽によって「窓」を感じ、その窓が開いて覗くことが出来る時、僕は希望を感じるのです。そしてそれは、唯、いい音楽だけによって可能です。あとの全ては、瞬間を楽しむ娯楽だったり、何かを忘れるためのものだったり、何か役割を持つものなのです。真にいい音楽には「窓」があるのです。例えば、マンハッタンでツインタワーが倒れた時、「おお、何かリアクションしなければ、書かなければ。ツインタワー・レクイエムを書いた！」というのは別にいいけれど、どうしようもないでしょう。

廻) 3・11以後、天災だけではなく、人災でたくさんの命が奪われました。国はまさにその国によって、人間はまさに人間によって滅亡していく、という事実をまえに、できることは何なのでしょう。音楽は音楽家によって衰退する。要するに自分は自分によって滅ぼされる。ギリシャ悲劇もシェイクスピアも、そこをえぐりだしてきます。そのえぐり出した表現の普遍性、常なる現代性、それを表現するという勇気とクリエイティビティに人間が感動し、それが人間の滅亡を防いでいることも事実でしょう。醜いものがあるということは、対極に美しいものがある、それは人間として死守しなくてはならない、ということを感じさせてくれることでもあります。原田作品のいいところは、未来に向けて書いているところ。何か破滅的なことが起こった時に「音楽は慰めになる、癒す、人のためになる」とか言ってわざわざ色んな人がやりますが、私はそんなことでは癒せないと思います。私たちにできることは未来に残すことであって、それには物凄いクオリティでないと未来には残らない。私たちは過去からの素晴らしい傑作を通して、人間がなにをしてきたのか見ることが出来る。楽譜を通して時代が見え、人間が何を考えて来たかを知ることが出来る。いいものでないとダメなのですが、ではいいものって何か？ゲルニカを知るにはピカソが必要だった。でもピカソが傑作だったからゲルニカを知れたし伝わった。いくら酷い惨状を画いても伝わりにくいと思う。何が言いたいかと言えば、創造する人が、いいものを創ろうとする態度、スピリットが大切だと思うのです。その時には、誰もいいと言わなくても、その時には感動しなくとも、創る人自身が「いいものを創りたい」と思うか思わないか、それだけだと思います。その腹の据わり方が、この曲にあったので、それに感銘受けたのです。

原田) 今回分かったことは、今回の惨事は、自分が生きている間ずっと、また国際的に波及していっくだろう重大な問題に繋がっていくということでした。そしてこの重大性に何十年も前から気付いていて、発信してくれてきた人々が日本にいるということを知った。それは自分の国に対して感じる、一抹の希望だったのです。

フツソング) それは貴方のとても個人的な作曲の動機の一つで、断片の幾つかは、人々

の名を記して謹呈されていますね。貴方の国では、あの事故後、それまであなた方の多くが見なかった、見えなかった、でも確かに有った様々な問題が露出し始めることになった。それは確かに貴方にショック与え、今も毎日、瞬間瞬間、貴方を苦しめていることを感じます。しかし貴方は芸術家で、創造的に、この惨事に反応した。希望を与えてくれる人々の存在という理由と別のレベルで。

原田) 私は作曲中は、これらの人々とは全く面識がなかったのです。

フツソング) そうだったのですか。

原田) 2012/11の世界初演を迎えるにあたり、普通は面識のない人に手紙を書いたりしないのですが、この時は特別な気持ちで全員の方にご招待を出したのです。

シュテファン) 貴方はこれらの人々を自分で探し出した。本当に必要としていたからです、事実を、真実を発信する人々が必要だった。これまでのメディアではもう、真実は知れないと直感したからです。嘘、秘密、操作、これまでの貴方の周囲から得られる情報はそういった欺瞞に満ちていた。いままで疑わなかったTVをはじめとするメディアは、もう信じられなくなった。そしてこれらの人々を探し当てた。

でも、そのこと自体は、この作品の演奏解釈者として実は、必要と感じないのです。これは貴方個人のことであって、もちろんエピソードとして知るのはとても興味深いけれど、特に安富先生のような方に直接お会いできて交流できることは素晴らしいけれど、演奏をする、という行為とは別のものだ、と感じています。つまり、純粋に音楽だけで成立できているということです。

廻) 演奏者、我々にとっては(作曲者本人も知らない人々なのですから)、二重に知らないのです。ただ、原田さんが、自らの必要に感じて真理を探求している人の存在を知って、それを感じ取ったのだと思います。「真理を探求する」そこが原田さん自身と、その人々の接点なのでしょう。要するに、専門分野は違っても同じ方向性を持っている。そういう人々なのでしょう。

原田) 自分はそれまで、音楽の創作活動で生きていくこと、それはとてもリスクの高いことで、それに命をかけてやってきたとっていたのですが、この人々の中には、現実に生命の危険と隣り合わせにも関わらず、40年以上も、善意にもとづいた発信をしてきた方々がいます。自分の無知愚かさを知り愕然としました。私はこの無知さゆえ、創作に没頭することの出来た40年間に感謝していますが、もうそういう時代には戻れないと感じてしまっています。

廻) でも貴方のような作曲家は、自分の羽をむしって作曲している、自分の身体をたべちゃっているようなものではないかと思うのです。「鶴の恩返し」。つまり、自分を殺していつているのではないかと思うのです。羽をむしって書いているのだけれど、不思議なことに、羽が後から後から生えてくる(笑)。

原田) そうならいいですけど。

廻) 非常に自分を痛めつけていますよね。そういう作品を頂いて、それを練習することは、今度は私達自身が自分の羽をむしることなのですけれど、それをすることがカタルシスなのですね。救われました。難しかったから、練習する、ものすごく練習しなければならなかったのですが、それで救われました。

フッソング) 特にこの作品の練習について思い出してみると、とにかく超絶なアンサンブルがあって、そこに時間を沢山割かねばならなかった。けれど、もっと別のことがあった。それは、一音一音に、極端なデリカシーが必要であったこと。音楽をかたちどる様々な要素、強弱・イントネーション・音色・二楽器のバランスなど。時間はむしろ、難しいパッセージをひたすら練習するというよりも、一音一音のための、最上の環境をどう得るか、ということだったと思うのです。僕らは一音一音、そしてひとつずつのジェスチュアについて、最上の響きを探した。2日とか3日に一度リハーサルをした。

廻) そうそう、この曲はまるでベートーヴェンの後期ピアノソナタに取り組むようなものでした。

フッソング) そう、とにかく十分に時間を費やさないと誰にも何も語らない。幸運なことに僕らは、その時間を確保し費やし、僕は信じられないほど楽しんだ。どのリハーサルも。そして毎回毎回僕らは何かを発見した。そういう準備期間だった。

原田) 2人の芸術的な姿勢がよく合うのですね。

廻) 何かより良いものを探そう、という姿勢が同じなのです。

フッソング) ここで作曲家に質問があります。

1. なぜこの編成で書いた？
2. 貴方はこれを世界中で演奏したいとっているが、何故？

原田) 編成は最初から決まっていた。あなた方に頼まれたし、あなた方が初演することで即決でした。編成について、ピアノとアコーディオンは(発音体がまるで違うので)普通に考えてしまえば難しいのですが、私は通常、どんな風変わりな組み合わせでも余り問題ないです。例えば2001年に、世界初のオリジナル作品として、笙とリコーダーの新作委嘱がありましたし、2013年2月にはベルリンを本拠地として活躍する AsianArt Ensembleのために、日中韓の伝統楽器+西洋の弦楽器を組み合わせで作曲しました。大切なことは、楽器を知ることだと思います。それは、流行の特殊奏法を知ることではないのです。楽器は、音楽作品と共に発展し、改良されてきたので、その楽器によって奏でられた、一番古い時代の音楽まで遡らないと分からないと思うのです。更に実際

に、目の前で聴く必要があります。CDとかYouTubeとかでは足りない。音を奏でる身体とか呼吸を見ないといけない。そこで重要なのが、優れた演奏家の存在です。Asian Art Ensembleのための作曲でも、事前にベルリンに行って、二泊三日、楽器を勉強するためだけに作曲家と演奏家が集まった。そういう地道なことを常にやっています。

2つ目の質問について。

今、日本は大きな傷口を開いています。子どもたち、そして主に富を持たない人々が命を危険に晒す仕事に就き、最も弱い人々が更に弱って行く、そんな状況なのです。それに声を上げる人々、つまり私が『Fフラグメンツ』を書く動機となった人々は、将来、その存在すら無かったことにされるかもしれない。歴史を振り返れば、事実を発信する人々が消されてきた史実がある。芸術家も含まれている。50年は人々の間で語り継がれても、200年は無理かもしれない。未来の教科書に一体どれだけの事実が書かれるのでしょうか。でもこれを音楽の中に記憶すればどうでしょう。私は作曲家として、今回、究極の方法をとらずにはいられなかった。ではどうやって作品の中にこの記憶を閉じ込めたか。『F.フラグメンツ』では具体的に幾つかの方法を試みています。1つ目の断片のタイトル”Twin Leaves”は、人間の欲望の全てが、一瞬で亡霊となってしまった土地の暗喩です。そしてそんなことになっても人間は、その土地に自分たちの明るい未来を見たいのだと知りました。私のように故郷を持たず、年中、旅しているような音楽家には実感できるはずもないですが、ある一つの土地に暮らすということが究極に何を意味するのかを、自分の方法でこの第1曲目に記憶しようと思いました。1999年に作曲したアコーディオン独奏曲『BONE +』のエンディングを、「墓場にふく風のように」と言ったのはピアニストの中川賢一さんでしたが、”Twin Leaves”のエンディングの「風」は、人間の墓場のレベルを超えてしまったと思います。そのあとに続く10の断片も、各々個別の方法によっていますが、それを全て説明する必要はないと思います。自由に聴いて頂きたいと思います。

フツソング) 各々は、ギリシャ悲劇のような、普遍的な意味を込めた断片なのですか？

原田) 作曲時、そのような意図はありませんでした。

フツソング) 地震後の惨事は、人間が自然というものに対して傲慢に振舞ったことが一因で、それは皮肉にもギリシャで言う、この世界の最も重要な4つの要素に悉く、日本が襲われたことでしょうか。最初に「土(大地)」が揺れ、次に「水(津波)」が来た。そして「火(火災)」が起こり、「風」によって運ばれた。今も風はふき続けている。

廻) 芸術作品の凄いところは、何らかの普遍性があって、それ1曲で千年くらいのことを語れるところですね。

廻・フツソング) 作曲中はどんな状況だったのですか？

原田) 殆ど発狂状態だったからか、旅の多い時期だったにも関わらず、どこでも作曲

しました。東京の自宅、ドイツの各地、マヨルカ島、ソウル、その他どこでも。そして最後の曲はローマで書き上げました。身体の中に音楽が湧いてきて、五線紙に、或いはピアノ向かった瞬間に、もう音楽が殆ど完成形となっている感じでしょうか。

こうしたやや即興的な、止められない勢いを、自分がどうコントロール出来るのか、そちらとの闘いの方が大変だったかも知れません。

廻) 原田作品は、この『F.フラグメンツ』も例外ではないですが、強弱を含め、音楽に求められる表現の幅がものすごく大きいですね。私はいつも、原田作品の響きを作って行く時に、ハイドンあたりまで戻って、そこからベートーヴェン後期くらいの間までの音楽を思い起こす。そこまでしないと原田の響き、音が出ないのです。それを演奏家にさせるような音楽なのです。

原田) 私の曲は「響き」はもちろんですが、「音から次の音へのタイミング」が非常に大事です。廻さんとのリハーサルでは、最初、少し違うところがあったので、少しだけ言うと、もう次回にはちゃんと、いいタイミングになっていた。

廻) 原田作品の譜読みでは、古典の基礎の基礎、楽器の音をどう出すのか、というところまで引き戻されます。それが出来ないと、音にならない。でも曲自体は非常に独特な語法で、コンクール的ではない技術を要求するので、凄く凄く難しいのです。聴いた感じはハイドンには聴こえない。だから時々忘れそうになるのです。美しい音を出すことや、古典派音楽に求められる基礎的なことを。そうするとパニックになる。どんどん下手になるのです。一番最低なのは、そんな時、どんどん音が大きくなってしまうこと。

原田) どうして音が大きくなるのですか？

廻) 弾けないからでしょう。弾けないと自分の音を聴かなくなる。「こうじゃないのに！」と解っていて、でも怖いから弾かずにいられない。10時間でも20時間でも弾く。そしてどんどん下手になる。J.S.バッハでもそうなのですが、曲に向かう度、同じ怖さを感じる。「あんなに練習したのにまたゼロからか」、という怖さ。

フツソング) (笑) それ、よくわかる。

廻) 私一体なにをやっているのか、馬鹿かと。それがあの日、あっ?!と解るのですね。練習って精神力が本当に大事。馬鹿な練習をしないための精神力。弾くよりも弾かないほうがいい練習もある。切羽詰まるととりあえず弾いちゃえ、という練習があるけれどそれは最低。あるレベルに達するまでの道のりは本当に大変。森の中みたい。シュテファンはどうやって練習するの？

フツソング) 原田作品については、最も重要なことは、必要な響きを実現するための「ボディ・フィーリング」を得ること。難しいパッセージが沢山あるので、早く弾けるようになるとして、指だけ動かすことをやろうとすると必ず失敗する。それは身体に入ら

ない単なる運動だから。原田の音楽のためには、詩的な演奏目指すということだけでなく、自分の身体を、その音楽の響きや時間に正しい状況にコントロール出来ないため。この練習にはものすごいレベルの集中力と時間を要します。でも一度身体が解ったら、もうその練習をしなくていい、そういう特別な音楽です。

原田：自転車に乗れるようになるような感じですか？

フツソング) NO,NO, そんな簡単なものじゃないよ(笑笑)。

原田作品の練習では、頭を完全に空にしないと無理。余計なことは考えられない。集中、集中、集中。精神修行。作曲家として何か言いたいことはありますか？

原田) いい音楽は「球体」のようなものだと思います。なぜ「球体」かというと、いい音楽には多様なアングルがあるのですね。作曲家自身が世界をどう認識し、何を感じているのか。それがただ音楽にすっと表れる。そしてその球体は角度によって様々な光を反射したり、独特の呼吸をします。演奏家は本当に大変。作曲家は自分を変えられませんが、演奏家は作曲家によって全く異なる音楽を、全身全霊で受け入れなければならないでしょう。私の音楽の実演は原則、幼少から訓練されて来た音楽家を必要としますが、そうでない子供や、特に合唱の分野ではアマチュアの方々によっても世界初演をして貰っています。私の音楽に必要なのは、音楽を敬愛し、音楽のために音楽を奏でることに集中できる演奏家だと、確信を持って言えます。

フツソング) この対談の最後に言いたいことですが、僕はこのデュオ曲がたとえ『F. フラグメンツ』でなくともこの曲を演奏します。タイトルは『ピアノとアコーディオンのための11の小品』でもいいわけです。どんな意味があろうと、エピソードがあろうと、それを全く知らずとも、1つの音楽として演奏したいと思う。

この曲については、僕らが仮にこの曲のバックグラウンドを何も知らないとしても、きっと、演奏家や聴く人は「何か」を感じると思う。何か深い意味があるのではないかと。

例えばJ.S.バッハのあの有名な、『無伴奏ヴァイオリンのためのシャコンヌ』のように。僕は最初、何の背景も知らずにあの曲を聴いていたけれど、これは何かあると直感していた。それで12年ほど前に、ある人が突き止めたのです、あのシャコンヌは、バッハの最初の妻(バーバラ)への秘められた追悼曲だったことを。

何百年か後、『F.フラグメンツ』を偶然、何の知識もなく聴く人は、きっとこの曲に何かを感じると思う。そして賢い音楽学者か誰かが、この曲が何だったのかを突き止めるだろうと思う。僕が言いたいのは、『F.フラグメンツ』は純粋に音楽として存在出来る種類のものだということ。純粋で深い。知識なしで充分いい。それが音楽の本質だと思うのですね。

(March, 2013 Conversation in Wuerzburg and Tokyo)